

第3章 伊佐・始良地方



平田遺跡（大口市）

第1節 先史・古代の伊佐・始良地方

伊佐・始良地方は鹿児島湾奥から熊本・宮崎両県の県境にかけて位置する。内湾に面する平野部、標高250m程度で広がるシラス台地、県内で最も面積の広い盆地、そして霧島山系あるいは九州山系へと連なる多彩な地形をもつ地域であり、それぞれの時代の特性に合った生活を窺い知ることが出来る。湾奥は始良カルデラの火口壁にあたり、思川・別府川・網掛川・天降川・検校川などがシラス台地を開析・侵食して土砂を押し流し、湾内随一の広さをもつ平野部を形成している。それぞれの川の中流域は、狭いながらも沖積地となり、湧水も豊富である。伊佐盆地は東シナ海に注ぐ川内川上流域にあたる。霧島山系は活火山であり、縄文時代以降幾度か大きな噴火を繰り返している。また、始良町・蒲生町境の住吉池と米丸マールは、縄文時代早期後半に活発な活動を繰り広げた。

この地域での考古学研究は鹿児島県考古学研究所の基礎をつくった寺師見國や木村幹夫などによって精力的に進められ、また、九州縦貫自動車道建設に伴う本格的な発掘調査が初期の段階で行われたことから、標識遺跡となっている例も多い。縄文時代早期の桑ノ丸式・手向山式・平楯式・塞ノ神式、中期の並木式のほか、現在では前期の曾畑式となっている日勝山式、深浦式に該当する日木山式土器が命名された地域である。また、中期後半の中尾田Ⅲ類土器も今後検討されて、一般的な名称になっていく資料であろう。

1 旧石器時代

シラス（始良・丹沢パミス、A.T.、入戸火砕流）が厚く堆積する本地域では、2万5千年前よりも古い遺跡は未だ発見されていない。ナイフ形石器文化期以降の旧石器時代の遺跡は、山間部で確認されている。福山町前原・和田遺跡では桜島噴出のP17火山灰の下から、台形様石器・ナイフ形石器とともに30基の礫群が検出された。また、P15火山灰の上位では三稜尖頭器・剥片尖頭器・切り出しナイフ形石器などが出土している。このように各時期における桜島の噴出物が堆積する牧之原台地一帯では、層位ごとに当時の生活を明らかにする事が出来る可能性

をもっている。大口市小野原遺跡では、ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・削器・搔器・敲石などがあるが、黒曜石の原産地である日東地区から1kmほどの距離に位置することから、320kgもの黒曜石が出土している。同様の石器を出土する日東遺跡も同地区内に所在する。黒曜石の原産地は日東地区以外に上青木が知られるようになった。栗野町木場A遺跡ではナイフ形石器文化期の礫群4基が検出されている。

細石刃文化期の遺跡としては、木場A遺跡・横川町星塚遺跡・吉松町七ツ谷遺跡・隼人町東免遺跡などが知られている。

2 縄文時代

草創期の遺物としては、石峰遺跡出土の多縄文土器が知られていただけであったが、始良町建昌城跡で薩摩火山灰層の下から竪穴状遺構4基を伴う集落跡が発見され、この時期の様相が明らかとなった。土器は隆帯文よりも無文のものが多く、南薩地区との違いが見られる。この台地上での生活は、その後も早期前葉まで連綿と続いている。なお、蒲生町漆地区で出土した槍先形石器は神子柴型石器ではないかと考えられている。また、福山町前原・和田遺跡ではこの時期の落とし穴が1基、同町永磯遺跡では土坑3基が検出されている。

早期になると、国分市上野原遺跡をはじめとして標高200mを越す台地上に規模の大きな集落が営まれるようになる。上野原遺跡では早期前半に竪穴住居跡52軒・連穴土坑16基・集石100基・土坑約270基・道跡2条が確認され、日本で初期の定住集落ということで、平成11年度に国の史跡に指定された。年代の根拠としては、桜島が噴出したP13火山灰が遺構を覆っていたことにより、約9,500年前よりも古いということがわかった。木場A遺跡では連穴土坑が6基検出され、ブリッジ部分が崩れ落ちた後、その煙道部分から再びトンネルを掘って省力化を図った様子が窺えた。大口市松尾山遺跡では1cm程度の小型の剥片鏃が多量に出土し、狩場を想定させる。早期後半は上野原遺跡や福山町城ヶ尾遺跡に代表されるように、壺形土器や耳栓など縄文時代の風習・風俗を考える上で興味深い遺物が多数出土している。

上野原遺跡では252基の集石遺構と11基の土器埋納遺構が検出され、城ヶ尾遺跡でも集石遺構28基と土器埋設遺構4基が検出されている。いずれも環状に配されており、最初から環状を意識したのか、それとも長期間の営みの結果としてこのような形状になったのかは更なる分析が必要であるが、環状の中心に位置する物体あるいは空間は意識されていたものと考えられる。土偶・パレット形をした土製品・環状石斧・異形石器など現在の我々から考えて用途不明の遺物が多いのもこの時期の特徴である。自然の恵みと恐怖に対して、畏敬の念をもってとり行われた行為に用いられたものと考えられる。吉松町七ツ谷遺跡でも手向山式土器から塞ノ神式土器にかけての良好な資料が見られる。隼人町宮坂貝塚と国分市平楯遺跡は早期後葉の地点貝塚であり、ハマグリ・ハイガイ・ヒメアカガイ・アカニシなどが出土している。標高20mに位置することから、この時期には海水が近くまで迫っていたと考えられる。このほか、加治木町三代寺遺跡などがこの時期の遺跡として知られている。桜島のP11火山灰と米丸マールは早期後半の同時期頃に噴出し、この時期の土器編年に欠かせない指標となっている。吉松町七ツ谷遺跡ではアカホヤ火山灰の直下から尖底の条痕文土器が出土しており、アカホヤ前後の土器を考える上で重要な資料である。

アカホヤ火山灰の噴出後、どのような過程で人間の営みが回復されたか注目される場所であるが、前期の遺跡は川の近くに多いことから、流域が住環境として早く回復したと考えられる。大口市並木口遺跡で轟式土器が出土している。平野部で生活が営まれるようになるのは曾畑式土器が使われていた頃からであり、それ以前は地球規模の温暖化に伴う海進で水没していた様子が窺える。曾畑式土器以降の遺物しかみられない加治木町干迫遺跡・高井田遺跡、始良町小瀬戸遺跡・中原遺跡、隼人町春花田遺跡がそのことを裏付けている。縄文時代前期の火山噴出物には桜島が噴出したP5火山灰があり、曾畑式土器を覆っている例が、上野原遺跡で知られている。曾畑式土器以降の土器の様相はまだ解明されていない部分が多いけれども、大口市瀬ノ上遺跡で曾畑式

土器に後続する土器が出土している。横川町星塚遺跡では前期末の良好な土器が出土している。加治木町日木山洞穴は前期末から中期初頭にかけての洞穴遺跡で、ハマグリ・コシダカガンガラ・ウミナヤシカ・イノシシなどの動物遺存体が出土しており、県内では同時期の類例がほかにない中で当時の環境復元に有効である。

中期は遺跡数は少ないものの興味深い例が知られている。菱刈町松美堂遺跡や加治木町干迫遺跡では、瀬戸内地方でつくられたと考えられる船元Ⅱ式土器が出土しており、瀬戸内地方の文化が広く流入した様子が窺える。この時期に瀬戸内地方の影響を受けてつくられるようになった春日式土器は独自の発展を遂げたが、その最終形態を始良町南宮島遺跡でみることができる。さらに、横川町中尾田遺跡では西海岸側に多くみられる滑石を含む並木式・阿高式土器のほかに、春日式土器と大平式土器をつなぐようなタイプの土器（中尾田Ⅲ類土器）も出土している。この時期における始良町中原遺跡の層位的な出土状況は興味深く、2mを超える水成砂質層の下位から春日式土器・大平式土器などが、上位から指宿式土器・市来式土器など後期の土器が出土している。すなわち、中期の終わりから後期初頭にかけてもう一度海岸線が内陸まで入り込んだことが窺えるのである。一方、内陸部の牧園町九日田遺跡では、中期末から後期初頭にかけての竪穴住居跡が4軒検出されている。福山町一本松遺跡でも、中期後半から後期にかけての多量の遺物が出土した。また、福山町永磯遺跡では御池火山灰の下から33基の落し穴が検出されている。

後期になると磨消縄文土器の流入が著しくなり、東日本の影響を受けながらも独自の文化を育んだ状況が窺える。加治木町干迫遺跡では、竪穴住居跡10軒をはじめとして多彩な遺構と多量の遺物が出土した。特に、市来式土器を主体としながらも鐘崎・北久根山・辛川・納曾・西平式土器と磨消縄文土器が同程度伴うことから、縄文土器はどこでつくられたのかという根本的な問題を投げかけている。また、朱塗りで注口をもつ壺形土器も出土しており、九州島以外の地域との交流があったことが窺える。菱刈

町年ノ宮遺跡でも在地の深鉢形土器と北部九州系の磨消縄文土器が出土している。文化の流入には、主に海を介することが考えられるが、九州山地ルートも想定しておかなければならない。上野原遺跡はこの時期になると、狩場あるいは植物利用の場所となったらしく、400mにわたって2列の落とし穴やヤマノイモなどの根茎植物を採掘したと考えられる掘り込みが多数検出された。隼人町楠元貝塚では犬の下顎骨が出土しており、この時期に猟犬をつかった狩猟も行われていたことが窺える。福山町(福山遺跡)では、後期終末の時期と考えられる軽石製の岩偶が出土している。

晩期は上野原遺跡で後半の時期の遺物が遺構に伴って出土しており、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴列・ドングリを貯蔵した土坑などが検出されている。また、国分市妻山元遺跡でもこの時期の土器が出土している。ほかの地区ではこの時期の遺跡が増えて、石製土掘具などの遺物が多数出土するのであるが、大口盆地から台地部分にかけては遺跡の数が少ない。

3 弥生時代

当地域での弥生文化の流入は比較的遅く、弥生時代早期の突帯文土器や前期の遺跡はほとんど確認されていない。国分市妻山元遺跡で刻目突帯文土器が、同市口輪野洞穴で前期の壺形土器が出ているだけである。縄文時代晩期の様相と共に、県内で早くから弥生文化の流入がみられる薩摩半島南部や都城盆地周辺と比較研究する必要がある。中期になると、台地上での生活が見られる。上野原遺跡では花卉状竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。また、直径2m～5m程の円形杭列や直線的な杭列が多数検出されており、居住空間の他に生産空間を含めた当時のムラの風景を解明する上で重要である。弥生時代の後期になると、平野部分でも遺跡が増加し、本格的な水田稲作が行われたと考えられる。水田稲作が本格化すると、広大な平地を背景に生産性を高めてきた。国分市本御内遺跡では後期の土器に伴って舶載鏡である方格付T字鏡の穿孔をもつ破鏡が出土した。その後、この地が大隅国の中心地となる権力社会の萌芽を見ることが出来る。隼人町小田遺跡

は弥生時代中期から奈良時代にかけての住居跡が確認され、低地での安定した暮らしぶりが窺える。大口盆地での弥生文化の流入も遅く、菱刈町野中遺跡で前期末の甕形土器が出土しているのみである。菱刈町前畑遺跡では終末期の竪穴住居跡3軒と共に土壙墓23基が検出された。組合せ箱式石棺墓・覆石を伴う木棺墓・組合せ式木棺墓などの形態があり、同時期の他地域では見られないものである。

4 古墳時代

川内川上流域は古墳の密集地帯として知られている。前方後円墳などの高塚古墳は存在せず、西海岸側に分布の主体がある地下式板石積石室墓と太平洋側に分布の主体がある地下式横穴墓の両者が存在する地域としても興味深い。吉松町永山遺跡では、地下式板石積石室墓に円形の周溝を巡らし、周溝内に壺形土器や高杯を供献している。大口市平田遺跡では140基の地下式板石積石室墓が検出され、平面形が多様なことから6世紀を中心としてある程度の期間墓地となっていたことが考えられる。平田遺跡の200m西方に位置する瀬ノ上遺跡では、3基の地下式板石積石室墓と11基の地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓は平入りのタイプであり、副葬された鉄鏃の形態から5世紀後半～6世紀初頭につくられたと考えられている。二つの墓制の関係については、「熊襲」と呼ばれた時代を考える上でも重要な課題である。菱刈町前目灰塚地下式横穴墓群でも地下式横穴墓3基・地下式板石積石室墓1基がみついている。吉松町馬場地下式横穴墓群は「平入りドーム状」の玄室をもつ8基からなる。竪壙の羨門に閉塞の板石を配する大隅地方に類似し、大口地方にみられるの竪壙上面を閉塞するタイプと異なる。牧園町中園遺跡でも2基の地下式横穴墓が検出されている。平野部の国分市亀ノ甲遺跡では土壙墓と考えられる遺構が4か所発見され、三累環頭大刀・宝珠鏢付大刀などが出土した。

この時期の集落跡は、ほかの地域と同様に何度も建て直しを繰り返しており、住居跡が重複して検出される例が多い。国分市城山山頂遺跡では43軒の竪穴住居跡が検出され、地元の土器である成川式土器と共に畿内系の布留式土器が出土した。城山山頂遺

跡の麓にある妻山元遺跡でも古墳時代初頭の竪穴住居跡13軒・土坑13基・溝状遺構7条が確認され、土器の良好なセットが出土した。また、製鉄遺構も確認されている。始良町平松地区では弥生時代終末期から古墳時代を通して集落が営まれている。保養院遺跡では弥生時代終末～古墳時代初めにかけての花弁形竪穴住居跡が確認されている。萩原遺跡ではかなり重複した住居跡群が検出されている。平松原遺跡では、竪穴住居跡内から鉄鏃が出土し、緊張した時代であったことを窺わせる。溝辺町東原遺跡では古墳時代中頃の竪穴住居跡が検出され、住居内から出土した土器は同時期の基準資料となっている。当地区の甕形土器は脚部が低いという点に、薩摩半島南部との差が見られる。

5 奈良時代以降

当地域は713年に日向国から分置された大隅国に属し、国分平野は国府・国分寺・国分尼寺が置かれた場所である。大隅国分寺は伽藍配置など未解明の部分が多いが、数度の小規模な発掘調査による布目瓦などの出土や溝状遺構の検出から、寺域の範囲が絞られつつある。国府・国分尼寺については比定地に留まるのみで、本格的な調査はなされていないが、大隅国府の位置は守公神社付近の国分市府中一帯と考えられているが、考古学的な証拠は得られていない。大隅国分寺で使われた瓦は、直線距離にして約14km離れた始良町宮田ヶ岡窯跡で焼かれたことがわかった。使われた軒先瓦から、日向国分寺との関連性が強いと考えられている。地区内は桑原郡と菱刈郡の2郡に該当するが、郡衙や郡寺などの所在が明らかになったところはない。『和名抄』によると桑原郡は大原・大分・豊国・答西・稻積・廣田・桑善・仲川、菱刈郡は羽野・亡野・大水・菱刈の郷からなっている。隼人七城の一つである曾之岩城と考えられている城山山頂遺跡でも確たる証拠は出ていない。比売乃城は隼人町姫城に比定されるが、残りの奴久良・幸原・神野・牛屎・志牟加の城については、本地区内もしくは近い位置に所在すると考えられるので今後の調査を待ちたい。大隅国に五社あった内の四社（鹿児島神社・大穴持神社・宮浦神社・韓国宇豆峯神社）は当地域に所在しているが、考古学的見

地からの調査は未だなされていない。また、豊前国などからこの地に移住してきたという史実もあるが、生活用具などの共通性からどの辺に住んでいたのかの特定はなされていない。官道については歴史地理学的見地から始良町船津付近が想定されていたが、城ヶ崎遺跡の確認調査によって大隅国府と蒲生駅を結ぶと考えられる道路跡が検出され、今後の追究が期待される。

菱刈町岡野古窯跡群は5基の地下式登窯跡が確認されており、9世紀代の須恵器が焼かれていた。萩原遺跡の竪穴式石室墓跡は県内唯一のものである。また、踊っているような人物を描いた土師器や移動式の竈など類例の少ない遺物も出土している。始良町小瀬戸遺跡は、布目瓦や「仲家」「大伴」などの文字資料も出土し、官衙的な性格の遺跡と考えられている。始良町小倉畑遺跡では10世紀頃の鉄製紡錘車などが副葬された方形周溝墓が検出されたほか、香炉と鉄鉢を模した土師器が出土し、寺院の存在を窺わせる。方形周溝墓跡は隼人町菩提寺遺跡でも検出されている。溝辺町山神遺跡では「奠」「廣」などの墨書土器が出土している。始良町平松原遺跡では、「奈」と書かれた刻書土器が出土している。吉松町七ツ谷遺跡では、皿状の土坑が2列に並んだ状態で検出され、標高の高い場所に所在する点も含め、その性格の解明が待たれる。隼人町東免遺跡の平安時代の焼土遺構で出土した仿製内行花文鏡は弥生時代後期に作られたものであり、鈕にはアオツツラフジと考えられる紐がついていた。伝世のされ方や鏡の使用方法について興味深いものがある。福山町中尾立遺跡では9世紀～10世紀にかけての掘立柱建物跡5棟と共に、墨書土器や焼塩土器が出土した。

(東 和幸)